

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02859

研究課題名(和文) 内容言語統合型学習(CLIL)による高校生の英語力および国際的素養の育成

研究課題名(英文) Fostering High School Students' English Proficiency and Global Citizenship through Content and Language Integrated Learning (CLIL)

研究代表者

工藤 泰三 (Kudo, Taizo)

名古屋学院大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：60734209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、既存の教科・科目、あるいは学校設定教科・科目等の活動において内容言語統合型学習(Content and Language Integrated Learning: CLIL)を導入することにより、高校生が海外の人々とともに学び考えるために必要な英語運用能力と、地球的課題に対し主体的に考え行動できる能力の双方を涵養することができることを、実践的研究により明らかにすることを目的として行われた。アンケート調査、授業実践研究等を継続的に行った結果、CLILのアプローチにより英語運用能力と国際的素養の双方の向上を図ることが可能であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化の進展に伴い、生徒・学生の英語コミュニケーション能力の向上が重要であるという声がよく聞かれるが、いくら英語を上手に使えるようになっても、私たちが抱えるさまざまな地球的課題を地球市民の一員として自分ごととして主体的に捉え、思考し、そしてその改善・解決に向けて行動できる力、すなわち地球市民意識(グローバル・シティズンシップ)がなければ、持続可能な開発に寄与することはできない。本研究は外国語学習と教科等の内容の学習とを統合する教育アプローチである内容言語統合型学習(CLIL)がその双方の向上に寄与する可能性を示した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at clarifying the possibility of content and language integrated learning (CLIL) with regard to both enhancing the learners' English language skills and fostering their global citizenship, hoping that they acquire both of them to communicate with people in other countries and to tackle various global issues actively. As a result of the analysis of the data collected by the survey of high schools, English proficiency tests, and questionnaire surveys on the learners' global citizenship, it has been suggested that the CLIL classes dealing with global issues would work positively in terms of improving both the learners' English skills and global citizenship.

研究分野：英語教育、国際教育

キーワード：内容言語統合型学習(CLIL) 地球市民意識(グローバル・シティズンシップ) 国際的素養 地球的課題

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2014年、文部科学省はスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業を開始した。そこでは「生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る」ことを目的としている(2014年3月28日発表より)が、これまでの高校教育の現場では「グローバル人材育成=英語を使える人材の育成」というイメージが強く、英語教育の場では社会課題に対する関心と教養、問題解決力などの能力の育成についてはあまり重視されてこなかった。

一方、外国語科や公民科、あるいは学校設定科目等で国際的素養の育成を主眼に置く取り組みも多くみられたが、その取り組みによる英語運用能力の伸長を同時に明らかにしようとするものは限定的であった。

2. 研究の目的

本研究では上記の背景を鑑み、国際的素養を持った高校生の育成を目指した教育活動において、内容言語統合型学習(CLIL)のアプローチを用いて、英語運用能力と、地球的課題に対し主体的に考え行動するための能力、いわゆるグローバル・シティズンシップ(地球市民性)の双方を高めるための高校生用の授業プログラムを開発し、そのプログラムを広く全国の高等学校に提供することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、目的の達成のために下記の方法を用いた。

- ・予備調査:全国の高等学校を対象とした国際教育に関する活動およびCLIL授業の実施状況に関する質問紙調査、および特徴的な回答のあった高等学校への訪問調査
- ・英語の学習と国際教育を融合させたCLIL授業の実践の集積、および教材・プログラムの開発
- ・授業実践による生徒の英語運用能力および国際的素養の変容の調査
- ・教材・プログラムの無償公開、およびそれによるフィールド校以外の高校からのフィードバック集積

4. 研究成果

2016年から2021年を研究期間とし、アンケート調査、授業実践、学会発表等を継続的に行い、多くの方々からのご助言もいただきながら指導事例の蓄積をした。

アンケート調査は全国の高等学校を対象として行い、455校から回答を得た(回答率9.6%)。授業実践については当初は筑波大学附属坂戸高等学校における継続的な実践を行うことを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大などによりその実施が困難であったため、主に研究代表者の勤務校で5年間にわたり実践を蓄積した。その蓄積をもとに、本研究に関する学会や研究会における発表・セミナー等は18回行い、その都度参加者から貴重なフィードバックを得ながら実践を継続した。

(1) 国際教育およびCLILに関するアンケート調査

アンケート調査は全国の高等学校を対象として行い、455校から回答を得た(回答率9.6%)。調査結果の詳細は本研究のウェブサイト(後述)にも掲載している研究報告書に譲り、ここでは要点のみを示す。

国際教育を促進する要素としては「担当教員のモチベーションが高い」(全回答者数のうち24.0%が選択)、「学校の独自性のアピール材料になる」(同22.6%)、「生徒により幅広い進路選択の機会を提供できる」(同25.9%)の3点が当てはまるという回答が他に比べて突出していた。他校にない取り組みを行うことで他校との差別化を図り学校の魅力を高めたいという願い、そして多様な学びの機会を提供することで生徒の視野を広げ、生徒に多様な関心を持ってもらい、卒業後には多様な道を歩んでもらいたいという思いが国際教育の原動力となっているということであろうか。ただ「担当教員のモチベーションが高い」という回答が多いことは、「モチベーションの高い教員がいなければ国際教育は成り立たない・やっていけない」ということの表れかもしれない。この点については、校内や自治体レベルでの研修、あるいは教員養成の過程の中で教員一人ひとりが地域的・地球的課題にもっと関心を持ちうるようなプログラムが提供される必要があるのかもしれない。

国際教育の阻害要因としては、「担当できる教員がない、または少ない」(全回答者数のうち40.0%が選択)、「国際教育に使える予算がない、または少ない」(同37.4%)、「教員間の連携や役割分担が難しい」(同37.1%)、「行事予定上の制約で、実施する機会を設けることが困難である」(同30.3%)といった、いわば組織やシステムに起因する要素を指摘する回答が目立った。予算の面は何ともし難い面があるが、教員間の連携については、むしろ各教員間のコミュニケーションを高め、それぞれが持っている専門的な知見を活かすことで、外国語科や地歴公民科など

の教員が単独で行う国際教育活動よりも多面的・多角的で充実した活動を実現できるであろう。

CLIL の実施状況については、「内容言語統合型学習 (CLIL) という用語は知っていたか」という質問に「知っていた」と答えた回答者は 31.4%にとどまり、「知らなかった」(67.9%)と大きな差があった。「現在 CLIL の要素を取り入れた授業・活動などを行っているか」という質問に対しては、「行っている」と回答したのはわずか 6.8%の学校であり、大多数が CLIL を意識した教育活動を行っていなかった。また、CLIL による教授内容を聞いた質問に対する回答として多かったのは、言語知識を除くと「国際教育分野」(12 校)、「理科・科学分野」(11 校)であり、CLIL と国際教育の親和性をうかがわせる結果であった。

(2) CLIL 授業による英語運用能力と国際的素養の向上

高校生を対象とした授業実践は計画通りに継続することができなかったが、並行して行った大学生を対象とした授業実践は研究代表者の勤務校で 5 年間にわたり継続することができた。

まず英語力の伸長については、教育測定研究所が提供する英語コミュニケーション能力テスト CASEC を用いて、受講生に 2017 年 7 月と同 12 月の 2 度受験してもらい、両者のスコアを比較したところ、対応ある t 検定の結果、CLIL 実施群ではスコアの上昇が有意であることが示された (別表 1 参照)。CLIL 非実施群においてもスコア平均の上昇は見られたが、統計上有意な差は認められなかった。ただし、どの群においても効果量は小さく、また各群の英語力には学年開始時点ですでに差があった (CLIL 非実施群の方が上位であった) ことには留意が必要である。

地球市民意識の変容の測定は石森 (2013) の地球市民意識自己アセスメント指標を用い、受講生を対象に 2017 年 4 月と 2018 年 1 月の 2 度アンケート調査を行い、ウィルコクソン符号付順位検定を用いてデータの変化を分析したところ、CLIL 実施群の受講者の地球市民意識のうちほとんどの項目について統計上も有意である顕著な向上が見られた一方、CLIL 非実施群ではほとんどの質問項目において統計上有意な差を示す向上が見られなかった (別表 2 参照)。

これらの結果より、国際的素養の向上を意識した CLIL 授業の実施により、学習者の英語力および地球市民意識の双方の伸長が期待できることが示唆された。

(3) 国際的素養の育成を主眼に置いた CLIL 授業の指導事例集の作成

前述の通り、CLIL のアプローチにより英語運用能力と国際的素養の双方の向上を図ることが可能であることが示唆されたことを受け、その後の授業実践においてさまざまな地球的課題をテーマとする指導事例を蓄積し、研究報告書に収録した。研究報告書の冊子はアンケートにご協力いただいた全国の高等学校に送付するとともに、本研究のウェブサイト (後述) 上でも公開することによって、指導事例を広く参照・応用していただけるようにした。さらには、地球的課題について考察しながら英語を学習するための大学生用テキスト 3 編 (いずれも共著) を出版したが、それらの編集においても本研究の成果を活かすことができた。

本研究の研究報告書は本研究のウェブサイト

(<https://taizo91.wixsite.com/kakenhi2016/research>) に掲載している。

引用文献

石森広美 (2013). 『グローバル教育の授業設計とアセスメント』. 東京: 学事出版.

別表 1 CASEC スコアの変化 (Pre: 2017 年 5 月、Post: 2017 年 12 月)

クラス	受験者数	Pre/Post	M	SD	Post M - Pre M	p	d
CLIL 実施群 (筆者担当)	88	Pre Post	358.43 372.85	111.38 99.77	14.42	.039*	.14
CLIL 非実施群 (筆者以外担当)	45	Pre Post	394.61 410.45	111.17 120.26	15.84	.147	.14
CLIL 非実施群 (筆者担当)	18	Pre Post	433.94 447.78	83.96 109.97	13.84	.329	.14

* $p < .05$

別表2 グローバル・シティズンシップ意識調査の結果（2017年4月と2018年1月の比較）

カテゴリー	質問	CLIL 実施群 (n=93)			CLIL 非実施群 (n=19)			
		Z	p	r	Z	p	r	
知識・理解	地球的課題	1	-4.845	$p < .001$	0.36	-1.112	<i>ns</i>	0.18
		2	-5.854	$p < .001$	0.43	-2.763	$p = .006$	0.45
		3	-5.154	$p < .001$	0.38	-0.596	<i>ns</i>	0.10
		4	-4.526	$p < .001$	0.33	-1.521	<i>ns</i>	0.25
	多様性・多文化社会	5	-2.607	$p = .009$	0.19	-0.926	<i>ns</i>	0.15
		6	-1.880	<i>ns</i>	0.14	-0.962	<i>ns</i>	0.16
		7	-3.101	$p = .002$	0.23	-0.254	<i>ns</i>	0.04
	グローバル社会・相互依存	8	-4.235	$p < .001$	0.31	-1.412	<i>ns</i>	0.23
		9	-4.059	$p < .001$	0.30	-0.830	<i>ns</i>	0.13
		10	-3.142	$p = .002$	0.23	-0.812	<i>ns</i>	0.13
技能・スキル	批判的思考・問題解決	11	-3.114	$p = .002$	0.23	-0.676	<i>ns</i>	0.11
		12	-3.662	$p < .001$	0.27	0.000	<i>ns</i>	0.00
		13	-3.517	$p < .001$	0.26	-0.569	<i>ns</i>	0.09
	コミュニケーション・協働	14	-2.106	$p = .035$	0.15	-2.183	<i>ns</i>	0.35
		15	-3.548	$p < .001$	0.26	-2.495	$p = .021$	0.40
		16	-3.304	$p < .001$	0.24	-0.680	<i>ns</i>	0.11
	情報収集・活用	17	-2.700	$p = .007$	0.20	-0.482	<i>ns</i>	0.08
		18	-5.079	$p < .001$	0.37	-1.574	<i>ns</i>	0.26
		19	-2.477	$p = .013$	0.18	-1.459	<i>ns</i>	0.24
		20	-2.920	$p = .004$	0.21	-0.979	<i>ns</i>	0.16
姿勢・態度・価値観	自己理解・自己認識	21	-2.112	$p = .035$	0.15	-1.070	<i>ns</i>	0.17
		22	-1.307	<i>ns</i>	0.10	-0.688	<i>ns</i>	0.11
		23	-1.373	<i>ns</i>	0.10	-1.360	<i>ns</i>	0.22
	異文化や多様性の尊重・寛容	24	-1.815	<i>ns</i>	0.13	-1.657	<i>ns</i>	0.27
		25	-0.956	<i>ns</i>	0.07	-0.663	<i>ns</i>	0.11
		26	-1.425	<i>ns</i>	0.10	-0.883	<i>ns</i>	0.14
	地球市民の自覚と責任、行動への意欲	27	-1.496	<i>ns</i>	0.11	-0.749	<i>ns</i>	0.12
		28	-0.807	<i>ns</i>	0.06	-1.536	<i>ns</i>	0.25
		29	-2.738	$p = .006$	0.20	-0.749	<i>ns</i>	0.12
		30	-2.444	$p = .014$	0.18	-0.057	<i>ns</i>	0.01

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 工藤泰三	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 メルボルンの小学校訪問を通して見るビクトリア州における内容言語統合型学習（CLIL）の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 言語・文化篇	6. 最初と最後の頁 117-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001330	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 工藤泰三	4. 巻 31
2. 論文標題 リサーチとプレゼンテーションを軸にした異文化理解CLIL英語科目の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 言語・文化篇	6. 最初と最後の頁 71 - 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001246	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 工藤 泰三	4. 巻 48
2. 論文標題 グローバル・シティズンシップの涵養を目指したCLIL授業実践による学習者の変容についての考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 263～270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20713/celes.48.0_263	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 工藤泰三	4. 巻 29-2
2. 論文標題 地球的課題を扱うCLIL授業実践における高次思考を促す試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 言語・文化篇	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001070	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 工藤泰三	4. 巻 28 (2)
2. 論文標題 高等学校における国際教育の阻害要因～全国の高等学校を対象としたアンケート調査から～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 言語・文化篇	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15012/00000196	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 SDGs に主眼を置いた英語 CLIL 授業における学習者の変容
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 日本におけるCLILの課題を考える
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 授業学 (関西) 研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shigeru Sasajima, Satsuki Kojima, Yukiko Abe, Motoki Sato, Barry Kavanagh, Taizo Kudo
2. 発表標題 Development of Teaching Materials for CLIL SDGs
3. 学会等名 日本CLIL教育学会第3回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 校種別にみるCLIL実践の展開
3. 学会等名 日本CLIL教育学会西日本支部第4回学習会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 犬塚章夫・安達理恵・工藤泰三ほか
2. 発表標題 CLILとアクティブラーニングによる外国語教育の可能性：地球的課題を扱うCLIL授業実践における学習者の思考の変化に着目する
3. 学会等名 第49回中部地区英語教育学会石川大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 グローバル教育における内容言語統合型学習（CLIL）の可能性
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 SDGsの達成に貢献するCLIL英語授業を目指して
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 Global issuesを扱うCLILにおける教材開発
3. 学会等名 大学英語教育学会第2回ジョイントセミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kudo, Taizo
2. 発表標題 Fostering Global Citizenship by Dealing with Global Issues in English Classes
3. 学会等名 大学英語教育学会第1回ジョイントセミナー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子・山野有紀・村上加代子・伊藤由紀子・李静香・森田琢也・工藤泰三
2. 発表標題 小中高大連携の英語とCLIL～思考力と4領域5技能統合へのTrack～
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 グローバル・シティズンシップの涵養を目指したCLIL授業実践による学習者の変容についての考察
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 犬塚章夫・安達理恵・榎本洋子・山西敏博・工藤泰三・村上裕美
2. 発表標題 CLILとアクティブラーニングによる外国語教育の可能性
3. 学会等名 第48回中部地区英語教育学会静岡大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 工藤泰三・今野良祐
2. 発表標題 高等学校における国際教育の貢献要因・阻害要因についての考察
3. 学会等名 日本国際理解教育学会第27回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 高等学校における内容言語統合型学習（CLIL）の実際と課題
3. 学会等名 全国英語教育学会第43回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 工藤泰三
2. 発表標題 CLILによる英語力養成とグローバル・シティズンシップ養成の融合を目指して
3. 学会等名 日本CLIL教育学会第3回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kudo, Taizo
2. 発表標題 How can we get subject teachers involved in CLIL lessons?
3. 学会等名 日本CLIL教育学会西日本支部第1回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 笹島茂、高木由香里、工藤泰三、佐藤真久、Larry Joe、Curtis M. Revis Seubert	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 120
3. 書名 CLIL 英語で学ぶSDGsの基礎	

1. 著者名 笹島茂、小島さつき、安部由紀子、佐藤元樹、Barry Kavanagh、工藤泰三	4. 発行年 2021年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 104
3. 書名 CLIL 英語で考えるSDGs 持続可能な開発目標	

1. 著者名 笹島茂・工藤泰三・荊紅涛・Larry Joe・Hannah Haruna	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 112
3. 書名 CLIL 英語で培う文化間意識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

内容言語統合型学習（CLIL）による 高校生の英語力および国際的素養の育成
<https://taizo91.wixsite.com/kakenhi2016>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	笹島 茂 (Sasajima Shigeru) (80301464)	東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授 (32718)	
研究分担者	佐藤 真久 (Sato Masahisa) (00360800)	東京都市大学・環境学部・教授 (32678)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	建元 喜寿 (Tatemoto Yoshikazu)	筑波大学附属坂戸高等学校・教諭	
研究協力者	今野 良祐 (Konno Ryosuke)	筑波大学附属坂戸高等学校・教諭	
研究協力者	吉田 賢一 (Yoshida Kenichi)	筑波大学附属坂戸高等学校・教諭	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	加藤 敦子 (Kato Atsuko)	筑波大学附属坂戸高等学校・教諭	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関